

SUSAP 2024 SPRING

東華大学 プログラム



2024. 2.19 ~ 3.24

参加者プロフィール（氏名、学部学年、台湾での一番の思い出）



農学部 3 年
岩間成吾(団長)
犬と野宿したこと



理工学部 3 年
北岡由衣(副団長)
ルーロンハン、ダンビ
ン、グンディンビンチャ



芸術地域デザイン学部 2 年
宮岡明熙
トラブルがいっぱいだった
こと



芸術地域デザイン学部 2 年
溝口愛望
人生で初めてバイクの後ろ
に乗せてもらったこと



経済学部 2 年
山口智史
バディや佐賀生と夜集
まって話した時間



経済学部 2 年
水野洸成
イーランでの温泉とマ
ッサージ



芸術地域デザイン学部 1 年
伊禮光日莉
バディの家でバディの友人
と 3 人で夜中までおしゃべ
りしたこと



経済学部 1 年
田中偉吹
たくさんの観光地を訪
れ、文化を直で楽しん
だこと



教育学部 1 年
坂口千紘
寮の設備が古かったこ
と



農学部1年
真子涼葉
野良犬が多いため、夜間の出歩きや一人行動で注意しなければならないこと



農学部1年
塚本明日香
犬カフェ



農学部1年
内田弥夏
人生初めての蛙食



経済学部1年
大津山心唯
東華大学の学生など、台湾の様々な人々と出会い、交流できたこと



農学部1年
笹木美桜
スカイランタン



芸術地域デザイン学部1年
古賀まなか
バイクで色々な所に連れてもらったこと



経済学部1年
深川広海
みんなで夜市に行ったこと

プログラム概要

【期間】 2024/2/19～2024/3/24

【留学先】 国立東華大学（台湾）

【内容】 東華大学では様々な分野の授業が開講されており、自分が興味・関心のある授業を受講できる。英語で開講されている授業が多数であるため、英語力向上も期待できる。約1ヶ月間、台湾の文化を学びながら、勉学に励むことができる。

東華大学について

東華大学は花蓮市郊外に1994年7月1日に創設された国立総合大学である。面積は台湾の大学の中で第2であり、学部は理工学部、人文社会学部、管理学部、原住民族学部、海洋科学部、教育学部、環境学部、芸術学部の8つで構成されている。

授業について

授業の多くは2コマか3コマで構成されており、1コマの時間は50分である。各自でどの授業を受講するかは選択できるため、時間割は人によって異なる。東華大学は総合大学であるため、幅広い分野の授業が開講されている。そして、英語で開講されている授業も多いため、英語を学びながら専門的な知識も学ぶことができる。また、中国語で開講されている授業や中国語の授業も受講することが可能なため、中国語を勉強できる。

バディとの交流

今回の研修で佐賀大学の学生1人につき1人の東華大学の学生がバディとして私達の大学生活をサポートしてくれた。バディとの交流は大学内にとどまらず、その多くがバディと共に旅行をしたり、食事に行ったりしていた。バディと共に行動することで台湾文化を多く感じる事ができた。

台湾での生活について

●大学の寮

私達はこの研修中に大学の寮に滞在した。私達が

滞在した寮は4人部屋の寮で、各部屋にシャワーとトイレ、一人一つ机と椅子があった。洗濯機や電子レンジは共用であった。寮は大学のキャンパス内にあるため、通学の面では特に困ることはなかった。寮の種類によって、古さや汚さが異なっていた。

市場・物価

全体的な物価は日本と比べて少し安い程度であった。しかし、ローカルなお店の食べ物やタピオカなどのドリンクは日本と比べるとかなり安かった。台湾には日本の製品が多く販売されていたが、その多くが日本の値段より1.5倍くらい高かった。世界的なチェーン店や有名な観光地などではクレジットカードが利用できるが、その他の多くはクレジットカードが利用できないため、現金を利用していた。

交通手段

大学内を移動するときや大学付近のレストラン、スーパーなどに行くときは基本的に大学でレンタルした自転車を利用していた。そして、花蓮市の中心や他の県行くときには、バスや電車を利用していた。その際、悠々カード(ICカード)が非常に便利であったため、私達の多くはそのカードを利用していた。また、台湾ではバイクを利用している人が多く、私達の中の何人かはバディにバイクを乗せてもらったりした。しかし、バイクが多く走っているため歩くときなどには十分気をつける必要があった。

食事

台湾料理は様々な種類があり、日本人にとっても食べやすく、美味しいと感じるものが多くあった。私達の多くも台湾料理を気に入り、たくさん台湾料理を食べていた。しかし、私達の中の何人かは台湾のご飯の多くに使われている八角と呼ばれる香辛料が苦手な人が多く、食事に苦労した人もいた。また、

台湾は外食文化が盛んで夜市と呼ばれるものがたくさんあった。そのため、私達の食事は基本的に大学付近のレストランに食べにいたり、夜市に行きご飯を食べたりと外食がメインであった。

まとめ

今回の留学を通して、私達は様々なことを学ぶことができた。それは、日本と違う生活環境で生きる大変さや、言語が違う国でどうやってコミュニケーションをとるかなど様々である。全体を通して私達は約1ヶ月間、大学で勉学に励むと同時に台湾の文化を学ぶことができた。この留学中に得られた経験や価値観を大事にしてこれからの生活に生かしていきたい。

「人生の深みを知る」

農学部3年 岩間成吾

初めに、今回 SUSAP の東華大学の短期留学のプログラムに参加しようと思った理由は色々ありますが、その中でも一番の理由は、将来世界で働ける人材になるためにより多くの文化や言語に触れ、色々な人と交流し、まだ自分の知らない世界を多く知るというものでした。

私は、この台湾の研修に行くまで海外には一度しか行った経験がなく、将来世界で働けるような人材になるには、世界を知らなすぎると感じていました。また、今後長期の留学をする機会があった時、色々な国に行くことで自分が長期留学をする際に適している国が分かり、行く先が決めやすいと思いました。そして、日本とはまったく違う環境の欧米諸国やアフリカの国々に行くのではなく、同じアジアの国にあえて行くことも今まで気づかなかった事に気づき、沢山の経験を得ることができのではないかと感じていました。そしてこれらのことから、今回台湾の研修に参加しようと思いました。特に台湾は日本の影響を多く受けている国だと思うので、この研修に参加することで、今まで私自身が見ることが出来なかった角度から物事を見ることができるかも知れないと考えていました。

台湾研修では多くのことを学びました。今回の研修で多くの東華大学の生徒や東華大学の留学生と絡む機会が多くありました。東華大学の留学生は基本的に母国語と英語は当たり前のように話します。そして、中国語も喋れる人がほとんどでした。そのため、彼らは基本的に3カ国語以上話せる人が多かったです。また、現地学生も日本の学生より英語が話せる人が確実に多いと感じました。この状況を目のあたりにして、私は率直に自分の語学能力の低さを実感したとともに、日本人全体の語学力のなさも実感しました。日本では英語を喋れる人がそこまで多くなく、ほとんどの人が日本

語だけを話すため、一般的に英語を喋れるだけで凄いとされる社会だと思います。私はこの状況に日本はもっと危機感を持つべきだと思いました。また、日本の英語教育が世界と比べて遅れすぎているのではないかということも感じました。このような気づきと同時に今回、世界の多くの英語を知ることができました。東華大学の留学生は欧米諸国や中南米、アジアなど色々な国籍の人が多くいるため、それぞれの国のアクセントや言い回しを肌で実感することができました。その時、英語という文学の幅広さや奥深さを感じました。このことは私にとって凄く興味深いものでした。これらの経験は、英語が第一言語ではない国に留学したこと、様々な国の留学生が多く在籍する東華大学に行ったことで得られたメリットではないかと思いました。また台湾は、英語が公用語ではないので、たびたび英語が通じない場面や伝わりにくい場面が多々ありました。その時、どのような英語が伝わるかということや英語を出来るだけ簡単にして伝えるかなどということを考える必要がありました。そして、簡単な英語とボディランゲージがとても重要であると感じました。このことを通して、言語を話す上でその言語を完璧に喋れるということ（文法や単語、アクセントが正しい）は重要な要素ではあるが、言語的に間違っても人とコミュニケーションをとる、互いに言語などを通して分かち合うということが一番大切であると感じました。また、その時に英語が母国語でない国の人たちが英語という言語を使い、互いにコミュニケーションを円滑に行うことができる英語の便利さを感じました。そして、言語を学ぶことで色々な人と話すことができるという素晴らしさを学び、より英語や他の外国語を勉強しようと思いました。

私は昨年、SUSAP のアメリカのプログラムにも参加しました。両方参加した人はあまりいないと思うので、今後 SUSAP の春の短期留学に参加しようと考えている人に向けて私が思うそれぞれの

良い所と違いを簡単に英語面中心に述べたいと思います。まず、アメリカのプログラムは英語の勉強のモチベーションを上げたい人、英語をとにかく使いたい人、自分の英語力を試したい人にもお勧めだと思います。そして、台湾のプログラムは様々な国の英語を知りたい、英語に頼る経験をしたい、生きたコミュニケーションを学びたいという人にお勧めだと思います。どちらのプログラムも英語能力を上げてくれるのは間違いなく感じています。それぞれの研修の総括的な違いとしては、アメリカは日本とは文化が違うので自分の価値観を広げる、人生の幅を広げる留学だったと思います。逆に台湾は日本と文化が似ている部分もあるため自分の価値観をもう一回見直す、人生の深みを知る留学だったと思います。一つ間違いないことはそれぞれの国に素晴らしい文化や言語、歴史があり、それらを学ぶことは素晴らしいことだと思います。また、それらを学ぶと人間的にも大きく成長できると思うので少しでも留学に興味がある人は参加してほしいと思います。私は今回の留学を通して、英語面での成長やコミュニケーション力の向上など様々な面で成長することができたと感じ、とても素晴らしい経験を得ることができたと思っています。

最後に、ここで感謝の言葉を述べさせていただきます。今回の留学を通して、大変お世話になった石松先生、及び佐賀大学国際課の職員の皆様、東華大学国際課の職員の皆様、及び東華大学の職員の皆様、東華大学でバディになってくれた皆さん、台湾で出会ったすべての人たち。このような方々のおかげで私達佐賀大学の学生は無事に台湾という国で素晴らしい留学を終えることができ、沢山の学びを得ました。今回の台湾研修のリーダーとしても一個人としても改めて深く感謝申し上げます。本当にありがとうございました。そして、一緒に台湾に行った佐賀大学のみんなのおかげで思い出に残る留学をすることができました。「謝謝大家！謝謝」



↑放課後、バレー部に参加したあとの集合写真

「出逢いに溢れた留學生活」

理工学部3年 北岡由衣

短期留学に参加した動機は、英語力の向上と自己成長のためでした。今回の目標は大まかに達成できたと考えます。この短期留学を通じて、佐賀大学や東華大学の学生との交流を通して、多くの経験を積むことができました。留學生活は充実したものでしたが、初めての海外滞在には不安もありました。しかし、予想に反して多くの友人を得ることができ、健康面でも問題なく過ごすことができました。留学に行きたいという思いから、1人で参加したこのプログラムで、同じプログラムの仲間だけでなく、台湾での仲間に出逢うことができたこの35日間は、自分自身にとってかけがえのない大切な思い出となりました。

授業について

週に20単位を取得する必要があり、東華大学で開講されている授業の中から自由に選択し受講することができました。私は、英語力向上のための英語で開講されている授業はもちろん、韓国語が好きであったため韓国語の授業と、健康維持のためのヨガのクラスも選択しました。

英語の授業では、特にコミュニケーション能力の向上に努め、グループディスカッションやプレゼンテーションを通じて積極的に参加しました。ま

た、異文化に触れる機会として、アメリカやイギリスの文化や音楽について学ぶこともできました。個人的に楽しかった授業としては、韓国語とヨガの授業でした。どちらも中国語で開講されている授業のため、言葉の壁はありましたが、韓国語は韓国語で、ヨガは体で学ぶことができ良い経験となりました。韓国語の授業では、グループに分かれて授業を聞くだけでなく、グループでの会話練習など体系的な部分もあり、現地の学生と韓国語を通じて仲良くなることができました。韓国語で仲良くなった子達とご飯を食べに行ったり、観光地に連れて行ってもらったりする機会もありました。ヨガのクラスでは、体の芯から体全体を動かしていくことで心のリラックスにもなりとても良かったです。

授業以外について

印象に残ったこととしては、食べ物が美味しすぎる、優しい人が多い、可愛い犬・猫が多いという3つのことがあげられます。まず食べ物は、最初の香辛料が強いイメージとは違いつつ全部が美味しかったことです。八角という香辛料がほとんどの食べ物に入っていますが、自分自身気にならずにむしろ入っている方が美味しいと感じるほどまででした。特に私のお勧めは、ルーローハンです。お店ごとに寄って少しずつ味が違うのが面白く食べ比べをしてみると良いと思います。1つだけ唯一食べられなかった食べ物があり、臭豆腐でした。これは、日本でいう強め納豆のような存在で、台湾の人でも食べられる人と食べられない人がいるそうでした。次に、優しい人が多かったという話なのですが、バディがバスの定期券を購入してくれたり、授業で仲良くなった子たちがご飯に連れて行ってくれたり、わざわざ車を出して送り迎えをしてくれたり、遠い観光地に連れてってもらったり、プレゼントをもらったり、席を譲ってもらったり、偶然知り合った人とテーマパークに遊びに行ったりと他にも数え切れないくらい優しいさに触れることができました。ここで出

会った人がいなければ、この短い留学期間の中をこれほど充実して過ごすことはできませんでした。本当に感謝しています。最後に、可愛い犬・猫が多いということですが、学校で飼育しているシャンマオという犬だけでなく、野良犬も何匹もいたり、お店の中などにも看板ペットとして飼われていたりして出会うだけで癒しを得ることができていました。こうして動物を身直に感じることができる文化も良いなと感じました。

この短期留学を通じて、英語力の向上だけでなく、異文化への理解やコミュニケーション能力の向上に取り組むことができました。台湾で出会ったすべての人に感謝し、今後もこの経験を活かし国際的な視野を持った人材として成長していきたいと考えています。



韓国語の授業の集合写真



花蓮のランタンフェスティバル

「この1カ月を振り返って」

芸術地域デザイン学部2年 宮岡明熙

本研修に参加するにあたって、私の最大の目標は中国語のスキルアップであった。結論から言うとかかなりのスキルアップになったと私は考える。本研修では、寮の問題や退寮の手続きなどで中国語を用いた真剣な交渉をするシーンが何度かあり、間違いなく過去一番で脳をフル回転して中国語での会話に挑んだと思う。このような経験は日本では到底できないようなものなので、自分にとってかなり貴重な経験になった。さらに私はHSKという中国語の資格検定を取得していたのだが、上の級の取得に向けた勉強のモチベーションアップにもつながった。また、私のアルバイトの職場はインバウンド、特に台湾からの観光客がよく来るようなところであるので、本研修前にも定期的に簡単な中国語を用いたコミュニケーションをしていた。そのため、本場の台湾でどれだけ自身の中国語が通用するのかも確かめたかった。結果としては、意外と通用したがポキャブラリーの少なさを痛感した。日常会話レベルの会話やお店での注文は難なくできたが、知らない単語が出てくる会話になると一気にわからなくなることが多かった。しかも私が日本で学習したのは普通語（北京語）であり、台湾語とは発音や単語が異なることが多かったため、私の発音で通じなくて中国語での会話がスムーズにできなかった場面が多々あった。そのようなときは、英語と中国語を織り交ぜてコミュニケーションをとっていたので、英語の練習にもなったと思う。5週間そこにいれば少しは耳も慣れてきて完璧にわからなくてもニュアンスで理解できるようになるので、ぜひ海外で成長痛を感じたい方は本研修への参加を勧めたい。

東華大学の授業は、佐賀大学とは異なっており、1コマ50分で、1つの授業で2~4コマ使うシステムであった。講義形式よりディスカッションやグループワークといった形式の授業が多かった。個

人的に日本語の授業がおすすめである。台湾の現地学生に英語や中国語を用いて日本語について教えたり、逆に彼らから中国語や台湾語について教えてもらえたりと自身の英語や中国語のスキルアップにつながった授業であったと実感している。欧米や東南アジアなどからの留学生も受ける英語の授業では、日本では見られないような授業風景を目の当たりにできたのが印象的であった。

ここからは次年度以降にこのプログラムに参加する方々へのアドバイスをいくつかしたい。まず、持っていくべきものについて2つ紹介したい。花蓮は晴れると暑いですが、曇りや雨だと一気に肌寒くなる。しかも小黑蚊という厄介な虫もいるため長袖のシャツや軽い羽織も持っていくといいだろう。次に、多少の凶々しさである。実際に私は、台湾のタクシー運転手が行先を聞かずに発車して結局遠回りになって料金が高くなってしまったということを2回ほど経験した。自身が不利益を被らないためにも凶々しく会話の主導権を握ったり値段の交渉をしたりする方が良いだろう。一方、持っていきべきでないものは以下の2つだ。一つ目は、高価な洋服や靴である。台湾は沖縄より南に位置するため湿度が高い。2月や3月でも湿度80%超えは当たり前である。カビが好む湿度は70%以上らしいので、いつ洋服にカビが生えてもおかしくない状況だ。また、寮の洗濯機で洗濯した暁には高確率で衣服がホコリか何かで白っぽくなり、悪天候だと大学の敷地内外の道路のコンディションが悪くなるので当然靴も汚れる。日本に帰国する前に捨ててもいいような洋服や靴で来ることをお勧めしたい。二つ目は、過度な期待である。私自身期待はしていなかったが、ここまでうまくいかないものかと当初落ち込んでいた。台湾は日本から近いからということで日本と同水準を求めがちになるかもしれない。実際私は少し求めている節がある。日本から近いとはいえ海外であるので、過度な期待はなるだけ持たず、何が起ころうともいように全ての物事を許容できる広い心を持って本

研修に臨んだら良いのではないと思う。

最後に、この研修は災難が多かったが、ほぼ見ず知らずであった15人の仲間と遠い台湾での友人と出会えることができ、間違いなく人生で一番記憶に残る春休みの約1カ月間であった。この研修での経験を糧に今後の大学生活をより充実したものにしていきたい。そして、東華大学の友人たちと東華大学が2024/4/3の地震被害からいち早く復興を成し遂げるよう願っている。



「一ヶ月の台湾生活」

芸術地域デザイン学部2年 溝口愛望

この一ヶ月は沢山の新しい経験ができた人生の中でとても貴重な期間だったと私は考えます。東華大学で留学をしたことで台湾人だけでなく色々な国籍の人と話しをしたり、考えを聞いたりすることができ、今まで知らなかった文化を沢山知ることができました。また、沢山の学部学科があることで、自分の興味にあった色々な授業を受けることができ、沢山の学生の異なる考えを聞くこともできました。それぞれの文化や慣習の違いからくる考え方の違いを授業中での会話から感じることができ、日本の自分の大学でただ授業を受けて

いるだけでは感じるこのできない価値観の違いを感じたり、知らない文化を沢山知ったりすることができたということが私にとって一番面白い経験でした。

授業の内容に関して、いくつかの特に印象に残っている授業があります。その一つとして挙げられるのは、English communication2の授業でのさまざまな文化を現地の学生が3、4人のグループになって発表をしていくという授業内容についてです。そのクラスの受講生の中にさまざまなルーツを持った学生がおり、中には題材として自分の文化を選んで紹介をしているグループもあったため、発表を聞くことがとても面白かったです。また、発表が終わるたびに「その文化と比べて日本の文化は似ているところがある？」などの質問を先生から受けることが多くありました。しかし、いざ答えようとするとその文化についてあまりしっかりと理解できていなかったり、英語でどの様に説明すべきなのか迷ってしまったりすることが多々あり、自分の国の文化をしっかりと説明できる様にもっと勉強すべきだったなと感じました。

また、日本語の授業もとても印象に残っている授業です。中国語で日本語の授業を受ける経験は初めての経験でとても新鮮で面白かったです。日本語を日常で使っていると、感覚で正しい文法を選んでいるのですが、授業を聞くと私自身も学ぶことがいっぱいあり、日本語を教える時にはこう教えたらいのだから、この言い回しは日本語の特徴的な点なのだなど発見することが多かったです。また、日本語の授業を受ける生徒数がとても多く、日本語がとても上手な人が多くいることにとても驚きました。このことに影響されて、私ももっと語学を勉強して話せる様になりたいと強く思いました。授業態度に関して東華大学の学生は授業に積極的な人が多いということを感じ、特に英語の授業では積極的に授業に参加する生徒を多く見かけました。東華大学では特に大勢の留学生がいるため、様々な考え方を知り、様々な文化を学ぶこ

とができ、毎回の授業の内容が濃く、学ぶことが毎日沢山ありました。留学期間が過ぎていくにつれて、英語に自信がなくてもグループワークの中で段々と自分から積極的に会話に参加していくことができる様になって行ったので、この感覚を忘れずに、日本でも積極的に言語を使ってみたり、グループワークの中で自分から意見を出したりする姿勢を忘れずに過ごしていきたいと思う様になりました。

東華大学の学生や先生、台湾の地元の人々に関しても沢山の思い出があります。一ヶ月間様々な授業を受ける中で沢山の東華大学の学生と会話をすることができました。私が英語と日本語のみしか話すことができないため、授業で一緒に話す機会があった学生たちが英語や日本語で話しかけてくれることが多く、そのおかげで私は沢山の台湾文化や台湾のライフスタイルを始めとして、花蓮市のおすすめのお店やお店への行き方など様々なことを知ることができ、沢山の経験を台湾で行うことができました。また、バディは私が台湾に来た初日から日用品の買い出しを沢山手伝ってくれたのに加え、私をご飯に連れて行ってくれたりプレゼントをくれたりと、とても優しく、本当に感謝でいっぱいです。授業で仲良くなった台湾出身の学生もバイクや車で私を色々な場所に案内してくれたり、言語を教えてくれたりしてくれました。また、教室移動についての中国語での張り紙があった際には、同じ授業を受けていた中国語を読むことができる現地の留学生在が教室はこっちと英語で伝えてくれて、その優しさもとても印象に残っています。先生に関しても一ヶ月だけという短い間にも関わらず、快く授業への参加を許可して下さり、授業で会話をするたびに台湾での生活を気にかけてくださっていることが伝わってきて、本当にありがたかったです。大学外でもお店の店員の方が英語や身振り手振りを使って接客をしてくれたり、旅行先で現地の方に道を尋ねた際にはとても丁寧に教えてくださったりしたことがとて

も印象に残っています。沢山の方の優しさのおかげで楽しく安全な一ヶ月を過ごすことができました。今でも仲良くなった学生複数人と SNS でメッセージのやりとりが続いていて沢山コミュニケーションを取ることが出来ているため、また次回会える時がとても楽しみです。



↑バディとのご飯



↑一番好きな台湾料理：牛肉麵

「SUSAP の振り返り」

経済学部 2年 山口智史

私は、SUSAP で台湾への短期留学をしました。私は留学期間中に多くの出会いや経験、学びを得ることができました。

まず、台湾での生活について述べます。台湾での生活は、私にとって毎日が新鮮で刺激的なもの

でした。話す言語、町の活気、交通、食事、多くのことが日本とは違いました。特に私が驚いたことは街の活気です。東華大学は花蓮市内から車で30分程離れた場所にあり比較的田舎な立地といえます。日本の田舎を想像したとき、多くの人たちは田舎に対して「人が少ない」「静かで活気がない」「お店もほとんどない」、このようなイメージを抱くと思います。しかし東華大学周辺は違いました。確かに自然が多く、高層ビルはありません。ですが多くの個人経営の店が立ち並び、人でにぎわっており、とにかく活気がありました。台湾の人々はあまり自炊をしないため、ご飯を食べる時間帯になると多くの人々が街に出てきます。これらの時間帯は本当ににぎやかでその場にいるだけで明るい気持ちになることができました。食事に関してもとてもおいしく毎日が発見の連続でした。次に今回のプログラムでの学習面について述べます。私は東華大学で主に英語の授業を受講しました。東華大学の授業は日本と比較して、よりアクティブな授業であったと思います。ひたすら講義を聞く授業は全くなく、プレゼンテーションやグループワークを交えながら学習しました。学生自体もとても積極的で自分から手を挙げて発表する様子もよく見ることができました。私もいくつかプレゼンテーションをする場面がありました。少し緊張しましたがクラスの雰囲気はとてもよく自信をもって行うことができました。また、授業以外でも英語能力の向上のために、英語の勉強も積極的に行いました。なぜなら東華大学に行った最初の1週目、私は英会話の面でとても苦しい思いをしましたからです。私のバディの南澤さんはとても英語が上手で、いつも明るく話してくれました。しかし私は英会話の経験がなかったため、ほとんど話すことができませんでした。そこで、私はこのままではだめだと思い、授業がない時間で英語の自主学習を行いました。文法の基礎知識はあったので、それを英会話として使うことができるようにすることにフォーカスしました。具体的

には、YouTube を見て日常で使えるフレーズを覚えたり、身の回りにあるものや状況を英語で表現してみたりする練習を行いました。すぐに大きく変わったわけではありませんでしたが、慣れも重なり、最後の週では南澤と二人で会話ができるレベルにまで成長しました。実際に彼からも私の英語能力はとても向上したといわれました。このように一か月ほどの研修でも大きく英語能力を向上させることは可能であると実感しました。

台湾での一カ月は本当に私の人生において重要な時間となりました。多くのものを目にし、多くの人々と出会いました。研修が終わった現在でもバディや SUSAP メンバーの佐賀大生と連絡を取り合っています。この研修に参加できたこと、多くの素晴らしい人たちとかわることができたことに今一度感謝したいと思います。この経験をより素晴らしいものにしていくためにもこれからも様々なことにチャレンジしていきたいと思います。



「台湾研修を振り返って」

経済学部 2 年 水野洸成

今回の台湾留学では最初にグループで友達を 100 人作るという目標を立てました。また、自分の中の目標としてアグレッシブに動くという目標を立てました。知らない食べ物だったり、知らない土地だったり躊躇しないでアグレッシブに挑戦

していきたいと思ったからです。以上の点を踏まえて今回の台湾への留学は、異文化理解を深めると同時に、新たな学術的な視野を開拓する機会となりました。本レポートでは、私の台湾留学における経験と成果を報告します。台湾には、花蓮市の国立台湾大学で 1 か月の短期留学プログラムに参加しました。

花蓮市は田舎でしたが自然がたくさんあり文化的な体験も豊富でした。留学中、東華大学で週に 20 時間履修して様々な体験をしました。特に日本語の授業では私たちが普段使っていて気にしていなかったような受け身や尊敬語などハイレベルな講義で驚いたことを鮮明に覚えています。台湾での留学は、英語を使った実践的な会話の練習と台湾文化の理解に役立ちました。現地の人々との交流を通じて、台湾の豊かな文化や伝統を学び、自身の言語スキルも向上させることができました。現地での交流の中でよく行っていたのが一緒にご飯を食べることです。ご飯を通じて現地の人とコミュニケーションをとるのが楽しかったです。一緒にご飯を食べると自分が知らなかった知識が得られたり、現地ならではのおすすめ料理を教えてもらったりと自分にとって良い刺激を得ることができました。留学中の休日は大学寮になるべくいらないで旅行に行ったりできるだけ遠出するようにしていました。せっかく春休みを丸々使って台湾にいるのに観光をしたり楽しまないのは損だと思いアグレッシブに動くようにしていました。旅行に行った中で特に印象に残っているのはイーランです。私は温泉やサウナ巡りが趣味なのですがイーランは温泉で有名な所と聞いていたので正直台北よりも楽しみでした。行ってみた感想としてはまず街並みが THE 温泉街というのがすごく好きでした。また温泉やサウナに何回か行きましたがどれもすごく好印象でした。公共風呂というものにも入ってみましたがお年寄りばかりでしたが薬湯やサウナがあり、かなり自分的にはよかったです。その他には台北にも旅行に行きました。

一番印象に残っている観光地は九份です。千と千尋の神隠しのモチーフともなった九份ですが実際に行ってみてその景色に圧巻されました。九份でご飯も食べましたがもちろんおいしかったですし、お土産売り場もいたるところにあり時間も限られていたのもあり、いい意味ですごく困りました。自分はそこで台湾ウーロン茶を買いました。しっかり試飲もさせてもらって1番おいしいと思ったものを買わせてもらったのでいい買い物をしたと思っています。また九分でお茶会もしました。実際に目の前でお茶を入れてもらい、お菓子と一緒に食べたのですが本当においしかったです。お店の雰囲気も良かったのもあり、時間があつという間に感じました。

大学の授業は主に英語と日本語の授業を履修しました。日本語の授業ではすごくハイレベルな内容を目の当たりにしました。自分たちが普段何気なく使っている日本語を文法や形式を1つ1つ細かく分類して授業しているのを見てシンプルにすごいと思いました。また日本語の授業で隣になった人が歴史好きな人で時間があるときに台湾の歴史について教えてもらったり、台湾と日本の歴史上の関係性など興味深い話を聞いたりすることができました。英語の授業では主に初級コースを履修したのですが授業すべてが英語で行われていたため理解するのが初めの方はかなり大変でした。しかし何回か受けているうちに英語を聞いてから日本語に変換する能力が向上したおかげかだいぶ慣れることができました。この英語の授業では主に英語を理解する力が身についたと思っています。大学生活でのごはんは主に学食を利用したり志學の街中に行ったりしました。私が街中で食べ歩きして一番気に入ったのはジーパイです。簡単に言うとフライドチキンのようなものですがフライドチキンよりもジューシーで食べ応えがありすごく好みでした。また、台湾全体的に鍋屋が多いなという印象でした。台湾の鍋は日本と味付けが違う上、入っているものがかなり違いました。正直日

本の鍋の方が食べなれているのもあって日本の方が好きだなという感想でした。しかし台湾の鍋がどういうのか体験できたので良かったです。この台湾での留学体験を通して英語によるコミュニケーション能力が向上したと思います。会話する際にすぐに文法を組み立てるように考える癖がついたり、もし文法が分からなかったとしても単語を組み合わせたリジェスチャーを使って伝えるすべを身につけられたと思います。その他にも度胸が付いたと思います。履修登録が直接先生の所にいってサインを貰わなければいけなかったり、日本語で知らない台湾人と隣になって会話の練習をしたり自分からコミュニケーションを取らないといけないという場面が数多くありました。もともと引っ込み思案な性格もあって最初のころはそれがきつすぎて頻繁にホームシックになったりしていましたが最終的に何とか乗り越えることができました。初めの頃に比べたらコミュニケーション能力は向上したかなと思っています。また最初の方はいきなり大学寮の4人部屋に入れられて知らない台湾人と住むことになったときこの1か月間やっていけるかなと不安になりましたがルームメイトはすごく気さくで話しやすくあつという間に仲良くなれました。私は将来的に海外に携わっていきたいと思っているので今回の留学は自分にとってすごく価値のあるものとなりました。今回の研修で学んだコミュニケーション能力や度胸を生かして就活など自分の将来で生かしていきたいと思っています。



↑何気ない朝食の風景

「台湾研修で得られたこと」

芸術地域デザイン学部 1年 伊禮光日莉

この約1ヶ月の研修を通し、私は大きく分けて2つのものを得ることができた。授業や学ぶことに対する私自身の意識の変化と、台湾で出会うことができた人々の存在である。東華大学の学生の授業に対する姿勢は目を見張るもので、初日から授業最終日まで驚かされるばかりだった。英語力はさることながら、プレゼンテーションのクオリティの高さ、授業に「参加」しているという積極的な学ぶ姿勢は、佐賀大学ではなかなか見ることができなかつたため、当初私はかなり圧倒された。しかし、圧倒されつつも私の向上心には良い刺激となり、私も彼らのようになりたいと思いつける1ヶ月だった。また、授業で出会った留学生は皆もちろん中国語や台湾華語で話すことができ、当初、英語がある程度できれば大丈夫だと思ってこのプログラムに参加した自分が恥ずかしくなった。バディや他の国からの留学生、ほとんどの東華大学生と話す際には英語で通じるのだが、一步大学の外に出ると、英語が通じないことが多かった。バスの運転手さんや店員さんがなんとやっているのかわからない、相手も英語がわからない、ということで上手くコミュニケーションができなかつたことがある。そこで私は、事前にここ台湾の言語を学んでこなかつたことをひどく後悔した。もう一つ、中国語や台湾華語ができればよかった、できるようになりたいと思ったきっかけになった出来事がある。それは、履修登録のためにあらためて、東華大学の授業を選択するためのサイトを見ている時だった。私の所属している芸術地域デザイン学部の学部・コース専門科目にあるような授業が、台湾華語で開講されているのを発見したのだ。これらを確認したとき、私はとてもこれらの授業を受けてみたいと思った。内容は佐賀大学で開講されているものと同じようなものかもしれないが、そこに台湾独自の考え方や慣習が加わって

いるかもしれない。それに加え、別の言語で似ているような授業を受けることにとっても興味が沸いた。他にも、台湾の歴史・文化や原住民に関する授業は台湾華語で開講されており、私は今回の研修で、言語がわかれば、学べる幅が広がることを知った。実際に、英語で開講されている Introduction to Performance of Arts という授業は、中国語、祖父母の家がインドネシアにあることからインドネシア語も理解できるという、ポーランド人の先生によるもので、授業内容としては舞台芸術、特にアジアに関するものを多く取り上げていた。先生の授業を聞いていると本当に、多くの言語ができればそれだけ自分の学びや経験を深められるのだということに認識させられた。言語の面でも、「私もこうなりたい」と目標になるような人と出会え、この研修のおかげで、より、学ぶということに関する意欲や強い意識を持つことができた。

私がこの研修で得られた二つ目のものは、台湾で出会うことができた人々の存在だが、上記の学習や言語の面とは少し異なる。少し大袈裟に感じるかもしれないが、かけがえのない友人たちに出会うことができた。バディは初日の生活立ち上げから最終日までずっと私や他の日本人学生のことを気にかけてくれたが、そのほかにも食事に誘ってくれたり、遠出をしたり、多くの良い思い出を作ってくれた。また、バディの友人と3人で出かけることもあり、この2人には感謝しても仕切れない。ただ出かけたり、楽しく過ごしたりするだけではなく、時には日本と台湾のジェンダー問題やLGBTQの捉え方の相違点に関して話すこともあった。また、私が、言いたいことをなんと英語で言えばいいかわからず焦ってしまったりしても、私が話すのを待ち、予想し、いつも「大丈夫だ」と言ってくれたので安心して会話することができた。英語で会話する機会が増えたことで、自分の英語力の低さを痛感し不安になった時に2人に相談すると、励ましてくれたり、「話すことが一番大事だからたくさん話そう」と勇気づけてくれたり、本

当にこの1ヶ月間は2人の優しさのおかげで過ごせたと言っても過言ではない。何より、2人とも対等に、あくまで「友人として」私と仲良くしてくれたことが嬉しかった。もちろん、優しく接してくれた東華大学生は2人だけではない。台湾文化学科の5年生で、昨年佐賀大学に半年間留学していた方には、台湾について多くのことを教えてもらった。台湾華語や、台湾の人が日本に持つ印象、花蓮に残る日本統治時代の建物や、道教のお寺について話してくれ、もちろんそれ以外にも日本文化や佐賀についての話もとても盛り上がった。台湾人以外でも、ミャンマーから来た学生やパラオから来た学生と仲良くなり、この1ヶ月間で、様々な背景を持つ人々と出会い、話せたことは忘れられない、私の財産になるだろうと思う。

以上の二つのことを得ることができた今回の研修だが、私の英語力は大きく向上していないように思う。口から出た後に、文法間違っていたな、もっと良い言い方があったな、と思うことは多く、特に英語の精巧性に関してはまだまだ自分でも納得がいかない。しかし、英語においての自分の弱点やまだ勉強不足なことが浮き彫りになり、自分の英語力が不安でも積極的に話しかけることができたため、今後の学習においての意欲に繋がった。東華大学で身につけた授業を受けるときの姿勢は絶対に忘れずに、佐賀大学でも同じように振る舞おうと思う。そして、自分が留学生、外国人になることで理解できた気持ちや苦い経験を元に、佐賀大学に来た留学生に、今回東華大学生が私にしてくれたように接したい。



「最終レポート」

経済学部1年 田中偉吹

私は、今回の台湾研修に参加するにあたって大きく2つ持っていました。一つ目が、英語の能力の向上です。特に、リスニング力とスピーキング力です。日本にいと、なかなか英語で話す機会が少ないので、海外で英語もしくは母国語以外で話をするという経験はよいものした。最初の不安としては、台湾自体、母国語が中国語であって英語は我々日本人と同じように学習を経て話せるようになった人が多いので、うまく伝わるかなということと、自分の英語能力でうまく話すことが出来るのかなというものでした。この点に関しては、台湾の大学生の英語力も、日本の大学生の英語力と同じようなレベルだな、と感じました。英語を話せる能力が高い人もいれば、そうでもない人もいるという感じでした。なので、時には翻訳機を使って会話をすることもありましたが、中国語が分かる人に訳してもらっていました。また、自分の英語の特に発音が良くなかったり、焦って言葉が詰まることもあり、何度も説明したりする場面があったので学校の授業では足りないなと思いました。帰国後は、留学生のチューターをするので、この経験を生かして積極的にわかりやすい表現で話していきたいです。2つ目は、文化の違いを感じるということでした。この点に関しては、

学内の様子と台湾を旅行した際に関して分けて書いていこうと思います。学内の様子に関して、まずは授業に関して述べます。授業では、日本の大学での授業では、生徒は教授の話を受けているだけ、ノートをとっているだけと、正直つまらないように感じる授業ばかりですが、台湾での授業の様子は、先生の問いに対して多くの生徒が受け答えをやるといったような、生徒が受け身になっているのでなく、しっかりと授業に参加していて、先生と生徒のコミュニケーションがあり、単調に進む授業ではなかったのにより分かりやすくより定着しやすいように感じました。また、プレゼンテーションに関してもとても感銘を受けました。日本だと、作ったパワーポイントに書いてある文字をただ読むだけということが多いのに反して、しっかり自分の意見を持ち、とてもわかりやすく引き寄せられるようなパワーポイントの作りや、発表の仕方がとても素晴らしかったです。こういった授業、また課題や自己表現の仕方に関しては見習うべき部分が多いなと感じました。また、自分は日本語の授業をとっていたのですが、とてもレベルが高くて驚きました。受け答えや発音もしっかりしていて、普通に話していても違和感がなかったくらいです、この出来事にはモチベーションを高められました。自分も英語以外の外国語も話せるようになりたいと、その出来事を発端により強く思い、その日から少しずつ自習室で勉強を始めました。

次に寮生活に関しては、トイレットペーパーを常に持ち歩かなければならないということに関して、最初は戸惑いもありましたが、すぐになれることが出来ました。また、拭いた後のトイレットペーパーは流さずにゴミ箱のようなものに捨てなければならぬところが多いという風に聞いていましたが、一緒に流して良い所が学外も通って多かったので、安心しました。また、カップルが開放的に恋愛をしている、公の場でも距離が近いという点が、日本と違うなという文化の違いを感じま

した。こういった文化の違いに関して、台湾の人に聞いたところ、台湾の文化はアメリカほど開放的でなく、日本ほどシャイではなく、アメリカと日本の中間だと聞いてとても納得したことを覚えています。旅行先での文化の違いといえば、車やバイクの運転の仕方が印象的でした。赤信号を無視するといったことは見かけませんでしたが、歩行者がいるのに構いなく通り過ぎる車やバイクはとても多く、危険を感じることはとても多かったです。また、バイクの数がとても多く、二人乗りが法律で許可されているので、二人乗りの人もとても多かったです。私も、バディにあった初日にスクーターの後ろに乗らされましたが、初めて乗るスクーターで、また、二人乗りをしたので日本では体験できないという背徳感で楽しく感じ、とても怖いといった思いをしたことを覚えています。また、お茶を飲む文化があるので、お茶屋さんが多くありました。サイズも日本のものと比べるととても大きく、普通サイズが日本のLサイズと同じようなお店が多かったです。食べ物に関しては、ほとんどの食べ物に八角が使われていて、特徴的な風味がありました。八角の風味が苦手な人もいましたが、だんだん慣れていく様子でした。

この研修の中では、多くの現地の学生と英語を介して話すことが出来ました。また、台湾人の方々だけでなく、他の国から留学でやってきたという方々とも英語を介して話すことが出来ました。多くの学生の人たちは自分の目的をしっかり持って、留学や大学生活を送っていました。そういった方々が多くいたので、自分のこの短期留学の目的を度々振り返って目的を見失わずにいたと思っています。このことから、こういった時でも目的をもって何かに取り組むことが大事なのだなと改めて再認識させてもらいました。そして、この研修に参加していた佐賀大学の学生の中には、中国語を話せる人がいました。その人が中国語でやり取りをしているところを多く見ていたので、大体何を言っているなと考えることができ、これって

どういう意味ですかという風に英語だけに限らず他の言語に興味を持つ機会にもなりましたし、やはりその国の言語に囲まれることでどんどん慣れて大体何を言っているのか把握できるということを感じました。このことからやはり、その言語を話したければ、その言語のみでやり取りをしている国ないし、そういった環境に身を置くことが大事なのだと気づかされました。このことについて、は聞いたことが以前にありましたが、経験を通して確信を持たせたと思いました。

これらの他にも、今回の研修からは様々な貴重な体験をしました。この経験や課題、反省をこれからの大学生活そして社会に出たときに活かせるように今後主体的に過ごしていきたいと思います。しかし、短期留学は短い期間であるため、すべての経験を十分に自分のものにするにはできなかったと感じています。もっと長く現地に留学することで、より多くの人との交流や文化に触れることが出来たと感じています。ですので、次回はまた違う文化である違う地域に留学をしたいと感じました。もし長期留学の機会が与えられたら、今回活かした経験に加え、多くの経験を積めるように、今回の反省や経験を踏まえ、スキルアップできるように学習を進めていきたいと思います。



「台湾研修を終えて」

教育学部1年 坂口千紘

1. 台湾研修に参加した目的

このプログラムの参加目的は主に二つある。一つ目は東華大学の英語で開講される授業や現地のバディ、他の国の交換留学生たちとの交流を通して高校までに培った語学力を向上させることである。二つ目は自分の生活圏内から飛び出して新しい価値観にふれ自分の成長と自立に繋げるためである。さらに私の専攻が教育であるので日本と台湾の教育的な相違点を大学の講義を通して発見することである。

授業について

研修中は東華大学の英語で開講されている教養科目の授業を受けた。学生がプレゼンテーションを行っていた授業の中で特徴的なものは American Language and Culture である。アメリカの文化の中から学生達は人種問題や銃乱射事件をテーマにしているのが印象的だった。なぜならこれらのテーマは依然としてアメリカにある問題でセンシティブなものであり、自分の意見を人前で発表することは難しいと感じるからだ。また学生1人で20-30分もプレゼンテーションをしていて、発表をした生徒の多くが人前で話すことに慣れているのは教育方針の違いからくるものだと考えた。他に印象的であった授業は西洋神話である。東西の神話を通覧して学ぶという授業であった。毎回講義前に約10ページの神話を読む必要があり苦労したが、授業自体はそれぞれの神話の概要を学ぶものであったため初学者の私でもわかりやすく学ぶことができた。この授業で印象に残っていることは沢山の神話を授業内で取り上げられたが、先生が学生に対して神話に対する問いかけをするとそれにすぐに答えている場面が何度もあったことだ。学生の豊富な予備知識の上で授業が成り立っていることを学んだ。これらの授業スタイルの違いは日本の授業を受けてきた私には新鮮な

経験になった。また授業の評価方法でも東華大学では授業内の個人プレゼンテーションを成績評価に取り入れている講義が多く、佐賀大学はテストやレポートが多い。したがって日本の大学では学生が講義の中で学んだ内容が定着しているかどうかに着目点をおいているが、台湾の大学では講義を通じて学生個人が考えたことを大切にしていることが違いであると考えられる。

授業以外で印象に残ったこと

授業以外の時間は主に現地の学生と交流していた。バディとはあまり会う時間が作れなかったがプレゼントをくれ、時間がない中ローカルフードが食べられる地元の人しか知らないようなお店に連れて行ってくれた。台湾以外の国からきている留学生とは大学近くのカフェに行った。留学生には母国の大学を卒業してから東華大学に留学している人や修士・博士課程の人がおり、普段あまり関わりがない少し上の年代の人達と交流した。バディや留学生と交流している中で私が緊張しないように話題を振ってくれ、自分の英語を最後まで聞いてくれるなどの気遣いに感動した。台北でMRTに乗った際も近くに乗っていた台湾の女性が目的の駅まで案内してくれ、さらに女性の家とは反対方向にも関わらずこちらの目的地まで案内をしてくれた。台湾の人の優しさに触れられた出来事だった。これからは台湾で受けたこの気遣いや優しさを私が受け継ぐ番であると考えた。研修当初は日本との衛生面の違い等に困惑していたがそれらを上回る台湾の人の温かみのおかげで1ヶ月間を過ごすことができた。

2. 研修を終えて

まず研修前に立てた二つの目標について、一つ目の語学力の向上については1ヶ月の研修の中で母国語が英語ではない人が話す英語は聞いて理解できるようになった。語学力を向上させるのには短い時間であったと思う。しかし語学力より大切なのは自分が相手に伝えようとする意思の強さが必要不可欠であると考えられる。研修初期は自分の英

語力に自信がなかったが慣れとともに不安は無くなった。現地の学生も私の英語が最初に比べて上達していると誉めてくれた。拙い英語ながらも自分の言いたいことを伝えようとする姿勢があれば、自然と相手も自分に注意を向けて聞いてくれるものだと考える。二つ目については、私は生来内気な性格であるため時間が経ってから授業内で隣の学生に勇気を持って話しかけてみると向こうも喜んで話をしてくれ仲良くなることができた。特に日本語の授業中に仲良くなった学生たちは皆日本のアニメから日本語に興味を持っていた。アニメや日本のソフトカルチャーについての知識は海外で日本の話題をするときに必要な不可欠であると感じた。

最後にこの研修中で学んだ一番大切なことは会話をするとき自分に自信を持って笑顔であることである。自分の英語力に自信を持てずにいた最初の方は表情が固く上手く会話ができなかったがこの点に気をつけると自分から挨拶ができるとようになり、現地の学生との交流も増えた。わずか1ヶ月の研修であったが、この先の人生のどんな場面においても役に立つことを台湾で出会った人々のおかげで身につけることができた。この経験を活かして大学生活をより豊かなものにしていきたい。



「留学を経て学んだこと」

農学部一年 真子涼葉

東華大学での台湾生活はとても楽しく充実した日々を過ごすことができた中で、学んだこともたくさんあった。

まずは生活面からだ。私は実家暮らしであり、自分でご飯を作ることも、家事をすることも一人暮らしをしている人に比べて少ない。なので、寮での生活は洗濯を始め、何もかも自分で行わないといけなかった。他にも、参加メンバーの先輩や友達とも日本での生活について話すことが多く、自分とは違う点で自立している点がたくさんあることを知ることができ、私は未熟で自立しなければならぬということを実感することができた。台湾の衛生面は日本と比べると発展途上のため、生活に慣れることも大変ではあったが、自らが進んで生活をより良いものに変えようとしたり、積極的に自分の意思を示していかないと相手に流されてしまったり、勘違いされてしまうことも多少あったので、何事も自らが動き出して意思表示することが大切であることを実感した。

次に語学面だ。英語が得意というわけではなく、好きであり上手になりたいと思っており、交換留学の体験をしようという気持ちで行った短期留学だったが、様々な壁に気づくことができた。リスニングの点では、人によって訛りが異なるため、特に授業での先生方が話すことには英語が聞きづらいものがたくさんあり、理解するのに時間がかかったり、そのため授業についていくのに支障が出たりと様々な困難があった。スピーキングの点では、自分が言いたい日本語でのニュアンスと英語でのニュアンスは若干異なっており、表したいことがそのまま表現できない葛藤や、日本で教えられた英語ではその意味の捉え方が異なっていたり、いざ話すとなると曖昧な単語力のせいで、似た単語が頭に浮かびあがり悩んでしまう時間が生まれたりなど悔しい場面は何度もあった。

私がしていた日本での英語の勉強方法は文章を読むことやニュースを見たりすることで、自分からアクションをおこすものでなかったため、台湾で実践することができてよかったと思う反面、帰ってからは単語力の向上や正確なリスニングの向上のために聞き流すだけなどではなく、一音一音聞き取り書きとれるような英語の勉強法に変えようと思った。

そして、文化の違いや人間関係面だ。台湾の人達は、三食全て外食で済ませる人が多く、朝から油ものを食べるのが普通であった。夜ご飯の時間帯は17時-18時で食べるのが多く、夜にはお腹がすくため夜食を食べるのも普通であった。日本ではあまり経験しない食生活だったため新鮮であった。印象的だった食べ物は、豚の血の塊を鍋や麺と一緒に食べることであった。また、人間関係面では、台湾人とは、とてもフレンドリーであり、日本人というサービスをしてくれ、日本語が書いてあると印象アップのため日本語で「おいしい」とかいてあるものもたくさんあり、日本人は台湾人に好かれていることを実感できた。日本人とは、私はバイトの中で仲が良く、佐賀大の人とは15人未満程度でしか日常会話をする人がいなかったため、世界線がバイトメンバーの価値観でしかなかったが、この交流を通して、同じ佐賀大の人との共感面や生活面を知ることができ、全く知ることができなかった視野を広げることができた。

この短期研修を通して困難なことにもぶつかることもあったが、それを上回る学びの楽しさや遊びの楽しさがあったため、一か月の研修を日本では味わえない充実した生活、貴重な経験をすることができた。



「台湾で学んだこと」

農学部 1 年 塚本明日香

私がこのプログラムに参加しようと思ったのは英語力向上のためと、自分の価値観を広げるためである。いろいろな国の人と交流することで、日本では感じることでできない価値観や文化の違いを見つけたかった。

この一か月間の台湾留学は、私にとって貴重な経験となった。まず感じたのは人とのつながりの大切さだ。私は、この一か月間でバディだけでなくいろいろな人と交流することができた。授業で仲良くなった人や、私が道に迷っていた時に話しかけてくれた人などたくさんいるが、その誰もが優しく親切だったので、会話するのがとても楽しかった。翻訳機を使ったことも多々あったが、そこで知った単語や表現を覚えることで自分の語彙も増やすことができたと思う。

東華大学の授業は、日本で受ける授業とは別物でとても刺激的だった。日本では聞いて学ぶ授業が多いが、東華大学では生徒が主体となって授業が行われていた。発表やディスカッションがメインの授業がほとんどで、ほかの人の考えをたくさん聞くことができ、とても楽しかった。アウトプットする機会が多いので、自分の今の英語力を知ることができると同時に、成長も感じる事ができる。English Communication Level 3 の授業は、週ごとにトピックが設定され、それについて 6 人グループでディスカッションをする授業だった。食べ物やスポーツについて話しながら、台湾と日本との違いについて知ることができたのでとても楽しかった。Sports & exercise について話し合う授業では、私は中学と高校でしていた剣道と弓道について話した。たまたま同じ班になった現地の学生が、以前剣道をしていた、と言っていた。日本以外の国で剣道をしていた人に会えると思っていなかったものでとても嬉しかった。English Communication Level 2 の授業では、2 人～3 人の

グループを作って英語のスピーキングの練習をすることが主だったが、私のグループはほとんど英語を話せない人しかいなかったのがグループ内での会話が中国語に進んでいくことも多くあり、コミュニケーションをとるのに苦労した。私が一番楽しかった授業は Mandarin Chinese Practical という授業で、様々な国の人と一緒に中国語を学ぶ授業だった。初回の授業は英語で行われていたが、だんだん英語が減っていき、私たちが受けた最後の授業はほとんど中国語しか使われなかったのがかなり難しく感じた。この授業の中で、2～3 人組のペアで会話文を作る、という課題があったが、英語で会話しながら中国語の文章を作るのがとても難しかった。中国語をほとんど知らない私にとってこの授業はとても大変だったが、英語で中国語を学ぶ、という貴重な経験ができたのでとても良かった。これらの授業の中で、私はインドやモンゴル、ベリーズ、インドネシア出身の人と話すことができた。それらの国の食べ物や観光名所について教えてもらったので、いつか訪れてみたいと思う。

次に、実際に台湾で過ごしてみて気づいたことを述べようと思う。まず感じたのは甘いものが多いことだ。行きの飛行機の中で飲んだお茶にも砂糖が入っていてとても甘く感じた。また、タピオカなどの飲み物を注文するときも氷の量と甘さを自分で選ぶことができた。花蓮市街にもデザートが食べられるお店がたくさんあり、夜ご飯の後に豆花などを食べることもできたのでとても充実した食生活だったと思う。また、交通事情も日本とは異なっていて面白かった。最初に花蓮に着いたとき、スクーターの多さに驚いた。車もスクーターも止まってくれないので、道路を渡るときは安全確認が必須である。バスに乗るときは、手を挙げて意思表示をしないと止まってもらえず、運転もかなり荒かったのが驚いた。

もし花蓮を訪れる予定がある人がいたら、私が一番気を付けてほしいのは虫刺されである。花蓮

はとても自然豊かな街なので、虫がたくさんいる。私は最終的に 100 か所近く刺されてしまい、初めて海外で病院に行くという経験をした。ぜひ気を付けてほしい。

この5週間で東華大学で過ごしたことは、私にとってとても素晴らしい経験になった。私は、学生たちのやさしさや温かさ、授業や異文化交流の機会を通じて、多くのことを学び、成長することができた。私は、ここで英語と中国語の能力だけでなく、コミュニケーション能力も身に付けることができた。これからも東華大学の学生たちとのつながりを大切に、台湾での素晴らしい経験を心にとどめておきたいと思う。



「最終報告書」

農学部1年 内田弥夏

この一ヶ月の SUSAP 研修を振り返ると、慣れない環境や文化の違い、第一言語がお互いに英語ではないために起こるコミュニケーションの難しさなどの困難な面も多々あったが、それ故により伝えるということを意識した英語の使い方や、他の環境に適応することの難しさと重要性などたくさんことを学べた研修だった。

授業は、一週間に二十時間という私のとっている日本の授業と比べても多い時間割だったが、一つ一つの授業が日本の授業に比べて、生徒と先生の関係性が近いことで、講義を受けている生徒がただ聞くだけの体制になってないことが特徴だと感じた。そのおかげで、参加しやすく、協力しやすい講義の形になっていた。私はほとんどの授業を英語のみ使う授業を選んで講義を受けたが、初めは、今回参加したこのプログラムが初めて英語だけで講義を受けた授業だったこともあり、単語のレベルが高く、話すスピードも私にとっては早いことも多々あったので、講義内容を理解するのが精一杯で大変だったが、徐々に英語を英語として理解できるようになり、生徒が先生と一緒に授業に参加し、先生も含めた講義に参加している人全員で、その分野の講義を楽しんでいることが伝わる授業だった。特に、コミュニケーションの授業が最も先生と生徒の境目が少なく、授業を受けて

いる人全員が一体となっていると感じた。三級の方では、毎週テーマに沿って、その内容に纏わることに関する質問を各自考えてきてその質問に対する答えを班内で答えていく形式だったが、英語での質問や応答をそれぞれ考えたことをしっかりと英語で言葉にしており、毎回班内の議論が活発であった。このこともあり、回を重ねるにつれて、私の英語を間違いや分からなくなることを恐れずに発言するようになっていて自分自身の成長を感じられた。また、二級の授業の方は、毎回英語の慣用句が提示されそれを使って英語の会話を考えるという授業だった。毎回三、四人の少ないグループを作ってその中で会話をする必要があるので、グループで一緒になった人達とたくさん会話することができた。そして、この授業では、この授業を受けている人全員の名前を覚えることが目標の一つとなっていたので、全員の名前や特徴、好みを聞く機会がたくさんあり、中国語が分からず、英語名を持っていない方など覚えるのが難しいことも多々あったが、みんな優しく何度も名前を教えてくれるなど、この授業の人との関係性が近くなったことで、積極的に話しかけやすくなり、授業が面白くなった。この授業で、話しかけてくれた台湾の学生と一緒に授業の後に昼食を食べに行くなど、新しい友達を作る機会となった。このことによって、表面的な関係だけではなく、よりお互いの生活や台湾と日本の違いなどを深く知ることができた。私は日本人だが、日本にいと日本語を勉強している外国人の姿を見ることは滅多にないので、日本語の授業とはどういうものか興味があり、日本語の授業を受講した。私は中国語がほとんど分からないので、理解できたのは日本語の部分だけだったが、私たちが普段普通に使っている平仮名やカタカナが外国の人にとってどれだけ難しいかを感じ取れた気がする。また、日本語の授業を受けている台湾の生徒が多いことに驚いた。私の感覚的には、台湾人にとって日本語は第三言語にあたり、そこまで多くの人が興味のある

ものではないものという認識だったので、多くの学生が日本語の授業を取っており、大勢の学生が、真剣に日本語を練習している姿を見て、驚き、感動した。この授業の中で台湾の学生と話すことをきっかけとして、外国の人から見た、日本の良さや魅力など自分の視点からでは分からないようなことについても話すことができ、改めて、自分の国について考える機会となった。授業の中で、普段日常生活で私が日本語を使う時に気にしておらず、何のことを言っているか分からないような規則性の説明があり、基礎の部分にも自分の知らないことが隠されていると気づき、改めて日本語や日本文化について普段絶対に復習しないようなところから、考え直すことの必要性を感じた。

生活面では、まず、私は一週間目に病気にかかった。私は日本で病気にかかることが少ないので、まさか一ヶ月の間に病気になるとは思っておらず、日本から市販薬は持ってきていたものの、熱さましなど、色々準備が足りていなかったと感じる場面が多くあった。今回の寮は、掃除用具の紹介がなく、自分たちで掃除用具を現地で買ったために満足な掃除ができなかったこともあり、綺麗とは言いづらかったので、休養を満足にすることも難しかった。そのために、日本の家やホテルという快適な場所ではないところでの熱に対して、空調や部屋の中の湿度に気をつけるなどできる限りの対策を考えて行動するなど初めての経験が多く、ある意味いい経験になった。その時に、今回のプログラムで一緒に来た友達やバディの人に飲み物や熱の時用の道具を買って貰うなど、友だちのありがたみや、日本にいた時の家族のありがたみを感じた。また、病院に行ったのだが、そこでの普段なかなか使わないような英語を使った自分の体調の説明や医者の方の説明を理解することが大変で、もっと英語を勉強しなければならないと感じた。

次に、私は最後の週の週末に高雄にあるバディのお家に泊めてもらい三日間過ごした。寮やホテ

ルではなく、他の人のお家に泊まらせて貰う機会は日本でもなかなかないので、初対面のバディの家族と話す機会をもらえて、ご飯を食べに行ったり、一緒にゲームをしたりすることで、言語の壁を超えて仲良くなることができた。バディの家に犬がおり、台湾の家族は多くの場合、犬を飼っており犬に対して親しみを持っていることを認識でき、多くの人に会うことが慣れていない犬と触れ合うことなど、大学の寮にいただけではなかなか難しい体験ができた。また、バディの兄弟の学校の話になり、東華大学以外の高雄にある大学についても知れた。高雄の南の方では野生の猿を見ることができるといふ、日本ではあり得ないような光景の話があり、台湾と日本の環境の違いを感じた。しかし、この話をしたことによって、台湾の大学の特徴や東華大学の特徴についても理解できたと思う。バディには、他にも鯉魚潭など、花蓮市の有名な場所に連れて行ってもらった。その場所に関する知識だけでなく、太魯閣の太魯民族に関することや、台湾の原住民に関する知識も教えてもらった。東華大学で原住民の人と話したのは、英語コミュニケーションの授業で一回だけだったが、ここで話を聞いていたので、日本ではあまり馴染みの薄い原住民の文化や伝統についても理解することができた。

食生活については、日本ではあまり外食文化が盛んではないので、寮でなく一人暮らしでも多くの場合キッチンがないことに驚いた。私はお肉料理によく入っている八角が苦手だったため、ジーパイなど揚げたり焼いたりした肉料理は食べられなかったが、それ以外については美味しく食べることができた。学食は佐賀大学と比べて、お店の種類が多く、メニューも豊富だったので、さまざまな料理を試すことができ、台湾の食事を楽しむことができた。

また、授業で知り合った人に花蓮市のおすすめのお店を紹介してもらって、自分一人や同じ日本人の中国語が喋れない人だけで行ってみるなど、

自分たちの力だけで、手探りで挑戦してみることができた。言語が全く通じない可能性があることは私にとって恐怖心が強かったが、自分一人で行動してみて、意外に携帯を使わなくても、なんとかなることが分かり、積極的に行動してみることの大切さが感じられた。それと同時に中国語で話しかけられた時に、中国語が分からないと答えることが、悔しいと感じ、もっと中国語を話せるようになりたいと思った。

この一ヶ月で2回程地震があったが、その2回目の時には、私は佐賀大学の人と花蓮市の料理屋さんにいたのだが、地震があった瞬間に、日本人だけが机の下に入って頭を守っていた。このことや、寮での避難訓練を通して、日本人が地震などの災害に対して強い意識を持っていることや、日本と台湾の防災訓練との違いを感じた。

一緒にお昼ご飯を食べた英語コミュニケーションで知り合った人にこの一ヶ月で、英語が上手くなっていると褒められて、とても嬉しかった。英語を日常的に使い続けることの重要性を感じ、必然的に使う状況になる留学に来て良かったと思った。



「台湾研修を通して」

経済学部 1年 大津山心唯

今回、私がこの SUSAP 台湾研修に参加しようと思った理由は、実際に違う言語や文化の人々とコミュニケーションを取り、視野を広げ、英語力を向上させたいと思ったからである。この東華大学プログラムが初めての留学だったので不安だったが、日本では味わえないような様々な貴重な体験をすることができた。約 1 か月間の台湾での生活を通して、①積極性を持つことの大切さ、②現地学生の英語力の高さ、③自分の価値観や考え方を相対的に見ることの必要性の 3 つを改めて強く感じた。これらのことを交えて東華大学での様子を勉強面と生活面の 2 つに分けて述べていく。

まずは、勉強面に関して、大学の授業について述べていく。東華大学では、全て英語で開講されている授業を履修した。クラスは、20 人～40 人程度の少人数での授業が基本だった。日本の授業と異なると思ったところは、学生側が中心となり、学生が主体となって授業が進んでいくところである。日本では、講義を聴講するスタイルの授業が多いが、私が受けた授業では、学生同士でのディスカッションやプレゼンテーションが毎週行われていた。東華大学の「英語コミュニケーション」の授業は、レベル 1～3 に分かれていて、私はレベル 2 と 3 を受講した。どちらも文法などの学習というより、とにかく英語を使って話すということに重きが置かれていた。レベル 3 の授業では、毎週異なるテーマについて数人のグループでディスカッションをする時間が設けられていた。ディスカッションの時には、現地学生の、積極的に発言して、周りと思疎通を図ろうとする様子に驚いたと同時に、自分の英語力の低さを痛感した。現地学生の中には、海外に行ったことが無いという人も少なくなかったが、総じて英語を話すことに慣れていない様子で、平均的な英語力が高く、日本との英語教育の差を感じた。初めは、自分の英語

力に自信がなく、自分から話すことに躊躇いがあったが、回数を重ねるうちに、徐々に慣れていった。ディスカッションを通して、私は、英語に対して難しく考えすぎていたのかもしれないということに気が付いた。英語でディスカッションをするにあたって、難しい文法や単語を使う必要はなく、基礎的な知識や相手と意思疎通を図ろうとする積極性がありさえすれば、何とかできるということを実感した。また、「American Language & Culture」の授業では、学生が、アメリカの歴史や文化について、自分の興味のあるテーマでプレゼンテーションが行われていた。まず驚いたのは、プレゼンテーションの時間の長さだ。5 分や 10 分程ではなく、1 人約 2、30 分間、英語で話し続けていた。パワーポイントの完成度も高く、プレゼンテーションのレベルの高さを感じた。毎回、プレゼンテーションの最後には、質疑応答の時間があつたが、その時、学生が自分の意見や疑問に思ったことを、その場で臆することなく積極的に発言している様子を見て、意識の高さを強く感じた。日本では、質問することを躊躇したり、恥ずかしいと思ったりする人も少なくないので、授業中に思ったことをその場ではっきりと伝える様子はとても新鮮だった。また、テーマは様々で、勉強になるものばかりだった。死刑についてのプレゼンテーションでは、「死刑制度について賛成か否か」という質問があり、クラスでディスカッションがあつた。死刑については、専攻分野でもあるので興味深かったが、もっと自分の英語力が高ければ、学びを深めることができたのではないかと感じ、引き続き英語学習を頑張ろうと思った。

次に、生活面に関して述べていく。平日は、日中は授業を受けて、放課後はルームメイトのバディの家に行ったり、夕飯を食べに行ったりすることが多かった。週末は、友達と台北に旅行に行ったり、花蓮市内を散策したりと充実した日々を過ごすことが出来た。台湾での生活で感じたことは、台湾の環境意識の高さと人の温かさである。台湾

のコンビニでは、箸やストローが付いて来なかった。最初は、日本のサービスが良いのかと思っていたが、同じ授業の現地学生に聞き、環境のためだと知った。また、英語の授業で、「スクーターを持つことは必要であるということに同意しますか」という質問で、多くの現地学生が、「環境に悪影響を及ぼすため、持たない方が良い」と答えていて、環境意識の高さを実感した。台湾の学生は授業に限らず、学食などでも話しかけると、フレンドリーで親切に接してくれた。困ったことがあると、すぐに周りの人が助けてくれて、人の温かさを感じた。授業外では、自分から話しかけないと、なかなか英語を使う機会が無かったので、積極的に話しかけ、英語を話す機会を自分で作る事が大切だと感じた。

今回の研修を通して、様々なことを学び、自分自身を成長させることができる貴重な経験になった。台湾の文化や社会について知ることができ、また、様々な人とのコミュニケーションや台湾での生活を通して、以前よりも視野を広げることができたと思う。留学を通じて得た知識や経験を今後の大学生活に活かしていきたい。

最後に、今回このような機会を作ってください、サポートして下さった東華大学や佐賀大学の先生方、お世話になったバディや現地の学生の皆様に感謝申し上げます。



↑ 台北旅行で訪れた九份

「出会いと成長」

農学部1年 笹木美桜

海外研修を経験したことで、想像以上の能力を身につけることができた上に、自分自身の成長に大きく寄与したと思います。

日本とは違う生活スタイルや人々の様子は、実際に自分が海外で生活して初めて理解するものです。台湾で生活して特に印象深かったのは、台湾の人々は磊落で元気な人が多いところや、コミュニティをととても大事にしているところです。家族や友達に対する思いやりがどんな場面においてもみられ、SNSに費やす時間は全くないというほど人と過ごす時間を大切にしているように感じました。授業中に現地で知り合った人が、私が読めなかった中国語のピンインをわざわざノートに何度も書いてくれたり、会話練習を何回も相手してくれたり、彼らのおかげでかなり中国語のスキルが上がったと思います。実際コンビニで「請幫我微波」と言ったのが伝わったときは本当に嬉しかったです。休日は花蓮市内を散策しましたが、日本とは違い深夜近くまで飲食店の営業をしていたり路地裏にもアパレル店や雑貨店がたくさんあったり昼も夜も一日中楽しめるところが特徴的で、値段も安いところが多く生活するのに便利な町でした。海辺でリフレッシュしたり、ビーチで友達とスポーツを楽しんだりする様子が毎日のように見られました。娯楽を楽しむ人々の様子が見られる一方で台北市内に行った際、町中にはホームレスの方が少なからずいて物乞いをしている姿がとても心苦しく何もできない自分への無力さに駆られ、格差問題について色々考えさせられました。

授業について、私は東華大学で英語と中国語がメインのクラスを取りました。中国語のクラスでは留学生や中国語を学びたい現地の学生が対象だったため、多国籍な生徒で構成されており、私にとってとても良い機会であっただけでなく、ネイティブスピーカーと話せる機会が私にとってそう

多くはなかったため彼らとの時間は貴重でした。また何か国語も話せるのが「普通」であるかのように、私が知り合った人たちはみな多言語を操っており私も現在3か国語を勉強中ですがまだまだだなと感じました。ディスカッションやプレゼンテーションが授業の大半を占めており、生徒は自分の意見をどんな場面においても言及していました。意見がぶつかろうとも相手の意見を尊重しあって話し合いを進めていく空気は心地のいいものでした。日本ではほとんどの授業が聞くことやノートをとることにフォーカスが置かれ、授業中の会話は非難されることがありますが、台湾での授業はクラスメイトや友達と「話す」ことに重点が置かれ、ほとんど集中力を切らすことなく楽しく授業を受けることができるので日本人に足りないと言われる積極性や主体性を培える機会でもあります。この研修を通して以前よりハッキリ意見を述べるようになりました。

台湾研修を経験して気が付いた私の一番大きな成長は、英語を「外国語」として捉えなくなった点です。中国語が話せないため、日常生活では英語を使っていますが今までと違う点は、英語を使っているときに「英語を使っている」という意識がなくなったことです。日本語は母国語のためわざわざ「日本語を使っている」という意識をもつことはないですし、今回の成長はそんな感覚に近いのかなと思いました。その感覚に慣れることができたのは、英語に自信がないから話さないのではなく自信をつけるために話すことが何よりも重要だと自分に言い聞かせ、それなりの努力をした結果だと思っています。言語が通じないことでハプニングも多くありましたが、その時その時で冷静に、柔軟に対処できたことも、身に着けることができた能力の1つだと思います。

研修全体を振り返ってみて、異国の地で国籍の違う人々と出会い、全ての瞬間から培った能力や学んだことは計り知れません。台湾研修の参加を認め金銭面でサポートしてくれた家族や先生方、

研修中に日本から応援して励ましてくれた友人、そして一緒に研修に勤しんだ仲間がいたからこそ、大きな成果を上げることができています。台湾研修に参加させていただいたことに感謝しています。



↑ビーチバレーをした時の写真

「台湾での一か月」

芸術地域デザイン学部1年 古賀まなか

今回の五週間の台湾研修でわたしは日本では体験できない様々な体験をすることができました。わたしにとっては今回が初めての海外で目に映るもの、触れるものすべてが新鮮なものでした。

台湾ではバイクが基本的な交通手段なのですが一台のバイクに4人で乗っていたり車と車の僅かな隙間を器用に追い越したりしていました。またわたしが台湾の友人にバイクの後ろに乗せてもらったときにバイクのメーターを見ると時速90kmを超えてははじめはすごく驚いたのですがスリルがあって楽しかったです。他にもデパートにあるアクセサリ屋の店員さんがグアバを丸かじり

しながら接客をしていたり実際に電車が通る線路のなかに入ってランタンを飛ばしたりと日本にいと考えられない、体験できないことがいくつもあり日本を客観的に今までとは別の視点からみるきっかけにもなりました。台湾での生活はすべてわたしをワクワクさせてくれるものでした。

一番印象に残っているのは大学での授業です。東華大学では基本的な華語を学習する授業とそれ以外はすべて英語で開講されているグループディスカッションをしたり専門的な知識を習得したりすることができる授業を履修しました。授業はほとんどすべてのものが先生よりも生徒が主体となるもので多くの学生が自分の意見を持っていて発表したり議論をしたりプレゼンをしたりする機会が日本で履修する授業よりも多かった印象です。その中ですべての学生が自分の意見を常に持っていることにわたしはすごく衝撃を受けました。特に政治に関するトピックや台湾での民族に関する問題などについて議論していてその時にわたしは何も自分の考えを持っていないことを感じさせられました。台湾では親しい友人間でも今の政治や民族問題についてディスカッションするそうです。日本での大学生はほとんどが自分たちの生活についてなどたわいもない話をしている印象であったので衝撃を受けました。同時に自国の政治はもちろん世界で起きているニュースにも耳を傾けなければいけないと認識しました。わたしが受けた授業のほとんどが英語で開講されていたので様々な国から来た留学生や華僑ではない在學生と関わる機会も多くありました。色々な国出身の学生と親しくなることで今まで感じたことがなかったような多種多様な考え方に触れることができました。私が持っている海外に対してのイメージや友人が持っている日本に対してのイメージを互いに共有し、実際とのギャップに驚かされることも多々ありました。親しくなった友人に教えてもらいながら様々な言語で大学であった時に「こんにちは」、一緒に食事を取っているときに「美味しい」など

と会話したこともすごく楽しかったです。

また海外での研修に参加したことで学習への意欲が高まりました。台湾の学生は日本の学生に比べて学ぶことへより積極的な印象です。東華大学の自習室は毎日 24 時まで開放されていて多くの学生がそこで勉強していました。わたしが親しくなった学生にまだ台湾にきて2年くらいのドイツ出身の方がいたのですがその方はレストランで食事するくらいには十分なマンダリンを習得していました。さらにとても驚いたことの一つに海外では母国語に加え英語やその他の言語を話せる人が非常に多かったことがあります。わたしは中高と外国語は英語のみしか学んできておらず英語が世界共通語であると思っていたので不思議でたまりませんでした。台湾で出会った友人に尋ねてみると「大学で英語以外の外国語を習得する機会があるのにどうしてほかの言語を話したいと思わないのか、言語を習得することでその国の文化や生活、新しい考え方を知ることができて自分の視野を広げることができ、人生がより豊かなものになるのに」と言われ啓発を受けました。せっかく台湾に研修に来たのだから少しくらいマンダリンを習得して帰国しようと思い、マンダリンの学習を始めました。はじめはピンインや日本語の漢字とは違う字体の漢字に苦戦することもあったのですがマンダリンを学習することで台湾の若者が使うスラングなどを知ったりレストランで注文するときにマンダリンで伝えることができるようになったりしてほかの外国語にも挑戦してみたいと思うきっかけになりました。

はじめは日本での生活とのギャップにストレスを感じることもありました。ですがバディや台湾の友達が花蓮の有名な観光地に連れて行ってくれたり、台湾の美味しい食べ物を食べさせてくれたりとそれ以上に楽しく充実した毎日を送ることができました。最後はバディや現地の友人との別れがさみしかったのですが帰国してからも連絡をとりつづけていて来年は日本に来てくれるそうなの

ですごく楽しみです。



「SUSAP で学んだこと」

経済学部 1年 深川広海

私は元々中国語の学習に興味があったこと、アジアの国に渡航したことがなかったこと、中華圏の文化歴史に関心があることからこのプログラムへの参加を決めた。

<東華大学での授業>

大学では週に9コース、21時間の授業を受けた。東華大学は佐賀大学に比べて教養科目の幅が広く、音楽や美術など芸術系の授業を受講することが出来た。私はピアノの演奏と指導について、コーラス、表現芸術の授業を受けた。私は長い間ピアノをしていたが大学で音楽を専攻はしていないため、大学入学後は音楽をしていない。今回の体験を経てまた音楽を始めてみたいと思った。他にもイギリスやアメリカの文化に関する授業、コミュニケーション英語など英語で行われる授業を中心に受講した。授業ではただ話を聞く授業よりも意見を交換したり、プレゼンテーションを行ったりすることが中心だった。

<言語学習について>

台湾では英語を話す人は少なく、英語を母国語

としている人に出会うことはほとんどない。自分で積極的に新しいコミュニティに参加しない限り英語を使う機会を作ることが出来ない。自分の積極性に欠ける性格のせいで英語を使うことは決して多くはなかったが、現地学生の学びに対する姿勢に刺激を受けた。台湾の学生は学び、特に言語学習に対する意欲が日本の学生よりも高かった。現に、バディと会話をしたり、英語コミュニケーションの授業で日本人と台湾人を交えたグループ学習をしたりする時には現地学生が会話をリードしている場面が多かったように思う。高校時代にほとんど英語を話すことが出来なかったときにイギリスに渡航した際には、数カ月の滞在で英語力が飛躍的に上昇したように感じた。しかし、今回の滞在ではあまり英語を上達させることは出来なかった。それによって、私の英語力を次のステップに進めるためには環境を変える事よりも語彙力を身に着ける事、机に向かって学習することが必要なことを感じた。

中国語を話すことが出来たら滞在期間をもっと有意義に過ごすことが出来たように思う。台湾は英語や日本語が通じると家族や友人から聞いていたが、花蓮の街中の商店街ではどちらも通じない店も多く言葉の壁を感じるが多かった。初めて海外に渡航した時にはある程度の英語力を持った状態で英語圏に行ったため、周りで話している言葉が一つも理解できない状況は凄く新鮮で貴重な体験だった。私の夢の一つは世界中の人々とコミュニケーションを取れるようになることなので、世界で2番目に話者の多い中国語の学習は不可欠だ。中国語の授業の抽選に落ちてしまい、他に学ぶ機会もなかったため、挨拶程度の語彙力しかなかった。しかし、今回実用中国語の授業を受講した際、他の国の出身の留学生に比べて日本語を母国語としている私達には漢字を書くこと、意味を理解することは容易であり大きなアドバンテージを感じた。発音を対面授業で直接学ぶことができた点で有益な時間だった。特に日本語にはない四

声や子音の発音は自分で身に着ける事が難しく大きなハードルだったが、これからの語学学習のきっかけを得ることが出来た。

<滞在中に気づいたこと>

台湾での5週間の生活で、台湾ではバイクが移動の中心であること、外食文化が根付いていること、水回り特にトイレの設備が日本と異なることを知ることが出来た。寮の設備は来年改修が入るほど古く、滞在中にトイレが2度も壊れるというハプニングを経験した。トイレの仕組みをインターネットの画像と照らし合わせて確認して、自ら修復することに成功した。言語や文化の学習、専門分野とは全く関係がないが、全て自分で調達し賄わなければならない生活で生き抜く力を身に着ける事が出来たのではないだろうか。また、台湾の学生は日本人よりも政治や社会情勢に関心を持っている。母国語ではない英語で会話している最中にも国際関係について意見を交わっていて、日本の政治についてあまり公言しない風潮とは大きく異なると感じた。その風潮が若者の社会への無関心にもつながっていると感じるため、日本もそのように変わっていくべきなのではないかと思う。

バディや台湾で出会った人々にたくさんの助けをもらいながら研修を終えた。休日にバイクに乗って海に行ったり、週末旅行に出かけたり多くの経験をすることが出来た。そして、私は自分の住んでいる街を英語で案内できるだろうかと考えたが、到底私にはできない事のように感じる。それをしてくれたバディには改めて感謝を伝えたい。それに加えて、自分の地域や日本の文化について深く理解しなければならないように感じる。

目標とする語学力を達成した暁には語学学習のためではなく、自分の専攻にかかわることを学ぶためなど、別の目的を持って今後長期の留学に行きたい。

